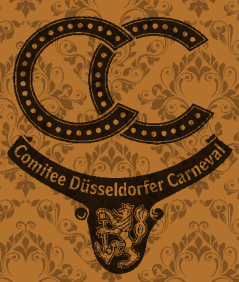




COMITEE DÜSSELDORFER CARNEVAL



VORWORT



デュッセルドルフ・カーニバルのファンの皆さまへ、

今年のカーニバルは、私たちの街にとって特別な意味をもち、カーニバル 200 周年を祝います。
この大きな節目と、長い歴史を誇るお祭りの伝統を、私たちは心から誇りに思っています。

200 年にわたるカーニバルの歴史は、ただ楽しい時間だけで彩られてきたわけではありません。
しかし、現在 「ヒュット (Hütt)」 では、私たちの冬の伝統であるカーニバルは、開かれた心、
寛容、そして多様性と人々の協力を象徴しています。カーニバルは私たちの街を豊かにし、
ラインランド地方の生活に欠かせない一部であり、毎年何十万人もの人々を魅了してきました。

世代を超えて、カーニバルに情熱を注ぐ人々が集まり、皆の力によってカーニバルは生き生き
とした催しものとなりました。人々の心は喜びにあふれ、素晴らしいボランティア精神が楽しい
共同体意識を生み出し、この冬の伝統を支えてきました。そのおかげで、デュッセルドルフは
偉大な伝統を保ちながら、進化し続ける生きたカーニバルの本拠地へと導かれてきました。

多様性に富んだカーニバルの中で、デュッセルドルフ・カーニバル委員会 (Comitee Düsseldorfer
Carneval e.V. / CC) が中心的な役割を果たし、楽しいお祭り騒ぎをまとめています。
デュッセルドルフ・カーニバル委員会 (CC) の創立は 1825 年であり、この瞬間がデュッセルドルフ・
カーニバルの誕生を象徴しています。今年のカーニバルでは、「200 Jahr – Hütt on wie et wor」
(200 年 — 現在と過去) というモットーのもと、この記念すべき 200 周年を祝います。

最後になりますが、デュッセルドルフ・カーニバル委員会 (CC) の設立 200 周年をお祝いするとともに、
デュッセルドルフ・カーニバルを愛するすべての人々にお祝い申し上げます！

Dr. Stephan Keller

Oberbürgermeister der Landeshauptstadt Düsseldorf
デュッセルドルフ市 市長

VORWORT



親愛なるデュッセルドルフのカーニバルの友人たちへ

2025年は私たちにとって特別な年です。今年、デュッセルドルフのカーニバルは記念すべ 200 周年を迎えます。1825 年 2 月 14 日、「祭りの運営カーニバル委員会」が最初の活動を開始し、最初のローゼンモンターク（バラの月曜日）のパレード（Rosenmontagszug）を開催してから、ちょうど 200 年が経ちました。

この記念の冊子では、デュッセルドルフのカーニバルの魅力を皆さんにお届けしたいと考えています。長い歴史とその発展を支えてきた人々、そして私たちの街が育んできた素晴らしい冬の伝統であるカーニバルについて、いくつかの重要な要素を取り上げましたので、ぜひお楽しみください。これらのテーマは、今シーズンのモットー「Hütt on wie et wor（現在と過去）」にも表現されています。

また、以下の QR コードを使って、デュッセルドルフのカーニバルやイベントについての詳しい情報をご覧いただけます。歴史やエピソード、さらにはこれからの予定など、皆さまの好奇心を刺激する内容を多数ご用意いたしました。

カーニバル期間中に行われるさまざまなイベントに、皆さまを心よりお迎えし、デュッセルドルフのカーニバルを共にお祝いできることを楽しみにしています。このデュッセルドルフ・カーニバル委員会（Comitee Düsseldorfer Carneval e.V./ CC）の設立 200 周年を機に、さらなる発展を目指し、未来へ向けて一步を踏み出していきたいと思ひます。

デュッセルドルフのカーニバルに関わるすべての皆さまに、感謝の意を込めて。

Lothar J. Hörning

Präsident Comitee Düsseldorfer Carneval e.V.
デュッセルドルフ・カーニバル協会 会長





Stadtsparkasse
Düsseldorf



VORWORT



読者の皆様、

200年のカーニバルと200年のデュッセルドルフ・シュパーカッセ。
この2025年は、両団体にとって特別な意味を持つ年です。

デュッセルドルフ・シュパーカッセを代表して、デュッセルドルフ・カーニバル委員会
(Comitee Düsseldorfer Carneval e.V. / CC) および地域の冬の伝統的なカーニバルを支えてきた
すべての団体と人々に心からお祝い申し上げますとともに、未来に向けたさらなる発展をお祈りいたします。

カーニバルは単なる日付の記念ではなく、1825年冬の最初のローゼンモンターク
(バラの月曜日)のパレード(Rosenmontagszug)と、その年の夏の「貸出所と貯蓄銀行」の開設が
深く結びついています。デュッセルドルフ・シュパーカッセは、この記念誌の発行を喜んで支援しました。

創業当初から、私たちの目指す方向性は共通していました。それは、人々の生活を
豊かにすることです。デュッセルドルフ・シュパーカッセは、経済的支援と理念的貢献を通じて
地域社会に積極的に寄付し続けています。これこそが、デュッセルドルフのカーニバルが
誇る特徴でもあります。人々を中心に置き、笑顔と協力の輪を広げる姿勢が共通しているのです。

この記念誌を通じて、多くの方々にカーニバルへの関心を持っていただければ幸いです。また、私たち
デュッセルドルフ・シュパーカッセも創立記念日を祝い、さまざまなイベントを計画しています。
詳細については後日ご案内いたしますので、ぜひお気軽にご参加ください。

2025年が、デュッセルドルフとそのカーニバルにとって素晴らしい一年となりますように。
共にこの記念すべき年を祝いましょう！

Dr. Stefan Dahm
理事長



**JAN WELLEM UND ANNA MARIA LUISA BEIM MASKENBALL
GEMÄLDE VON J.F. VAN DOUVEN**



Vorgeschichte



【カーニバルの歴史】

謝肉祭の夜、無数の松明^{たいまつ}やロウソクが灯され、デュッセルドルフ城の大広間はまるで魔法のような雰囲気^{たいまつ}に包まれます。豪華で精巧な衣装を身にまとった貴族たちに囲まれながら、ベルク公ウィルヘルム2世 (Wilhelm II. von Berg) とプファルツのアンナ妃 (Anna von der Pfalz) は、控えめにその華やかな狂宴を見守っています。一方、一般の民衆は旧市街の通りで自由奔放に祭りを楽しんでいます。

14世紀後半、デュッセルドルフのカーニバルが誕生した当時、このような光景が広がっていたのかもしれませんが。その後、17世紀にはプファルツ選帝侯ヨハン・ヴィレム (Kurfürst Johann Willem von der Pfalz) とその妃、アンナ・マリア・ルイーザ・デ・メディチ (Anna Maria Luisa de Medici) の統治下で、この居住都市は仮面舞踏会で名を馳せるようになりました。これらのヴェネツィア風の祭典は、選帝侯妃が現在のマールカステン (Malkasten) で貧しい人々を支援する目的で開催したものです。この時代に、デュッセルドルフの冬の伝統である『カーニバル』に欠かせない典型的なキャラクターが初めて登場したとされています。

その頃、デュルケンの「英雄カーニバル」 (Held Karneval) は、こうした祭典で人気のある登場人物でした。彼は祭りの参加者の中から「ヴェネツィアの女性」 - すなわち彼の「ヴェネツィア」 (Venetia) - を選び出すことができたのです。このような貴族の祭りは次第に裕福な市民階級へと広まり、やがてすべての人々が楽しめる本物の民衆祭へと発展していきました。

* マールカステン (Malkasten) は、デュッセルドルフ旧市街に位置する歴史的な芸術家たちの集いの場所で、19世紀中頃に設立された芸術家クラブに由来します。このクラブは絵画を中心に芸術活動を推進し、多くの芸術家が集まりました。現在、マールカステンはデュッセルドルフの文化的象徴で、芸術展示やイベントが行われる場所です。また、カーニバルでは地元の芸術家がアートやパレードのデザインを担当しています。

**「ヴェネツィア (Venetia)」は、デュッセルドルフのカーニバルにおける重要なシンボルとして知られています。都市の美しさと優雅さを象徴し、カーニバルの華やかさを体現する伝統的なキャラクターとして、人々に祝祭の雰囲気を漂わせています。カーニバル期間中には、多くのイベントやパレードに登場し、その存在はデュッセルドルフのカーニバルを彩る重要な要素となっています。



HÜTT



ROSENMONTAGSZUG



【 ローゼンモンタークのパレード 】

— 現在 —

世界中のメディアが共通して指摘する点は、デュッセルドルフのローゼンモンタークのパレードが、ドイツで最も政治的なローゼンモンタークのパレードであるということです。

この名声をデュッセルドルフは40年以上にわたって確立してきました。その成功に深く関わっているのが、ジャック・ティリー (Jacques Tilly) という人物です。

彼は卓越した芸術家であり、毎年政治風刺をテーマにした山車を制作しており、その作品は世界中で賛否両論を呼び、何よりも大きな注目を集めています。

デュッセルドルフの政治的なカーニバルと切り離せないもう一人の重要人物が、レオ・シュタッツ (Leo Statz) です。彼は1936年に設立されたカーニバル委員会の会長を務めましたが、1943年にヒトラーに関する発言が原因で死刑判決を受け、処刑されました。

政治性に加え、デュッセルドルフのローゼンモンタークのパレードを特徴づけるのは、郷土愛と国際性、創造性とユーモアが融合した独特の雰囲気です。デュッセルドルフのカーニバル団体が制作する幻想的で豪華な山車、世界各国から集まったカラフルな衣装をまとった歩行者グループ、そしてドイツや近隣諸国からの音楽隊 - これらの約1万人が、全長5キロにも及ぶ色鮮やかなパレードを作り上げます。毎年、このパレードは沿道の観客、家庭のテレビ視聴者、そしてソーシャルメディアを通じて数十万人の人々を魅了しています。



**1868 TRUBEL BEIM FASTNACHTSUMZUG
VON AUGUST V. WILLE**



WIE ET WOR



ROSENMONTAGSZUG



【 ローゼンモンタークのパレード 】

— 過去 —

1825年2月14日、デュッセルドルフで初めて開催されたローゼンモンターク (Rosenmontag) のパレードでは、緑のロバとカラフルな衣装をまとったリーダーが先頭を飾りました。この2人に続いて使者や音楽隊、数名のトランペット奏者、美しい神々の使者「メルクリウス (Mercurius)」が行進しました。その後ろには、東洋風の衣装をまとった「カーニバルの英雄 (Held Karneval)」が登場し、彼には宮廷元帥、式典マスター、デュルケンの宮廷道化師、子どもたち、そして馬に乗った6人の副官が同行しました。

さらに、24人の騎士、王子、使節団のメンバー、もう一人の使者、音楽隊、デュルケン民兵の指揮官と副官が行進を続けました。そして、明るく手を振る花嫁と花婿「プリスカとギセリヌス」 (Priska und Giselinus)、その両親、友人、数人の外国の外交官、侍女、侍医、そして学生たちも行列に加わりました。行列の最後には、アジアのラバに乗った夜警が登場し、観客を魅了しました。

当時の目撃者によると、最初のデュッセルドルフのローゼンモンタークのパレードを見守った観客の数は「計り知れない」ほどだったとされています。行進は約30分間続き、「盲目の人々さえも歓声を上げた」と記録されています。それは、周囲の人々が「壮大な行列の様子を細かく伝えたからだ」と伝えられています。

* Mercurius (ヘルメス): ギリシャ神話に登場する神で、神々の使者として知られています。

** Held Karneval (ヘルド・カーニバル): 現代のプリンツ(王子)に相当するキャラクターです。

*** Dülken (デュルケン): デュッセルドルフ近郊の都市で、カーニバルに関連する物語やキャラクターが登場する背景となっています。



**COMITEE DÜSSELDORFER CARNEVAL
ZOLLSTRASSE 9**



HÜTT



COMITEE DÜSSELDORFER CARNEVAL

【デュッセルドルフ・カーニバル委員会】

Comitee Düsseldorfer Carneval e.V. (CC)

— 現在 —

「カーニバルが終われば、次のカーニバルが始まる」という有名な言葉がありますが、これはデュッセルドルフ・カーニバル委員会 (Comitee Düsseldorfer Carneval e.V. / CC) の役割を的確に表しています。「楽しい日々」 (tolle Tage) が訪れるかなり前から、線密な計画と組織的な準備が必要となり。デュッセルドルフ・カーニバル委員会 (Comitee Düsseldorfer Carneval e.V. / CC) は傘下の70のクラブと共に、デュッセルドルフにおけるカーニバル全体の運営・調整を担っています。

執行部は11名で構成されており、会長、副会長2名、事務局長、財務担当者からなる執行役員会と、文芸担当、運営責任者、ローゼンモンターク (Rosenmontag) パレード責任者、山車制作責任者、広報担当、青少年担当、顧問からなる拡大役員会に分かれています。すべての役員は加盟クラブによって選出され、ボランティアとして活動しています。デュッセルドルフ・カーニバル委員会 (Comitee Düsseldorfer Carneval e.V. / CC) の明確な目標は、デュッセルドルフのカーニバルを継続的に発展させ、地域社会の中でその存在感をさらに高めることです。

* 『tolle Tage』は、ドイツ語で「楽しい日々」や「愉快的日々」という意味で、特にカーニバル期間中の祝祭のピークを指す表現です。

2. Auflage.

2. Auflage.

Preis 10 Pfg.

Nummer 1.

1. Jahrgang.

Düsseldorfer Allgemeine



Carnevals

Zeitung

Organ für „alle“

Carnevals-Vereine.

Druck und Verlag des
Düsseldorfer Vereins-Druckerei, N. 6.
Redaction: Bahnhofsstr. 52.

Insertionspreis
die vierzeilige Zeitspalt 5 Pfg.
Expedition: Bahnhofsstr. 52.

Erscheint Mittwochs.

Redigirt von Heinrich Rueben in Düsseldorf.

25. Januar 1893.

Wie es war und wie es werden soll!

Der feierliche Augenblick ist endlich da, wo es gilt, zu zeigen, daß unsere Noth trotz des langen Winterschlafes noch nichts von seinem alten Glanze verloren hat. Die Erde war trocken geworden, wie die Beine eines auf halber Kost stehenden Droschkengauls und die Menschen gingen schon in gedrückter Stimmung an einander vorüber. Einer wollte den Andern nicht kennen, obwohl die Meisten schon bis zum viermal wiederholt eingesandten Rechnungsauszüge noch enge verwandt waren. Die Luft hing voller Zahlungsbefehle und Pfändungsprotokolle, die Buchdruckereien hatten die Hände voller Arbeit und druckten Tag und Nacht Infectionsquittungen und Extraberichte über die Länge der Papierstreifen, welche bei jedesmaliger Auflage von ihnen verdruckt wurden. Die Annoncen-Aquisture ließen sich Blasen in die Füße und verbrauchten jeden Tag den Betrag eines Mittagessens für Lippenpomade, um ihre Annoncen-sammelberedungs-lappe in Aktivität zu halten. Die Mägdeherbergen waren überfüllt und Hunderte arbeitsloser Arbeiter waren nicht beschäftigt, die haushohen Haufen Schnee aus den Stiegen zu entfernen. Das Betreten des Eises des bis auf den Grund gefrorenen Stadtgrabens war polizeilich verboten und die Böden der Pferdebahnwagen waren mit Stroh belegt, damit keiner etwas an die Füße kriegte. Da erhob sich ein heftiges Schneegestöber, sodaß die Gesellschaft ihren Betrieb einstellte, das Publikum sich tapfer durch das Unwetter hindurch arbeitete und der Thierschutzverein der Pferdebahngesellschaft sein Vertrauensvotum abgab. Die Noth war groß und bitter die Enttäuschung, als nach langer Zeit der erste Salzwagen in Sicht kam und seinen Distanzritt aufnahm. Großes Gemurmel der Unzufriedenheit erhob sich in der Menge und Alles schrie nach Paprika, des Lebens Würze, um den durch übergroße Kälte geheminten Kreislauf des Blutes wieder in Bewegung zu bringen. Ein Jeder war davon überzeugt, daß etwas fehlte und hier und da erhoben sich anlässlich einiger größerer Volksversammlungen vereinzelte Stimmen, welche laut und in herediten Worten ihren Unwillen kund thaten. Doch das Schlimmste sollte noch kommen: das Eis des Rheines, welches in mächtigen Schollen an unserer schönen Düsseldorf vorüberzog, blieb vor Verwunderung stehen und nahm sich vor, nicht eher wieder seinen Standpunkt zu verlassen, bis — ja — bis — da erhob sich eine Stimme aus den Wolken und rief, daß die Fundamente der stehenden Rheinbrücke erzitterten, das Kaiserdenkmal sich vornüber neigte und die kleinen Fenster des neuen Rathhauses ihre Augen weit aufthaten, bis sie erschienen ist, nämlich die „Düsseldorfer Allgemeine Carnevals-Zeitung“, welche mit einem Schlage allem Elend und aller Sehnsucht ein Ende machte. Die sociale Frage war gelöst und Vergnügen und Freude herrschte allerorts. In Schaaren strömte das Publikum hinzu und es entstand ein gewaltiges Gedränge, so daß sich die Polizei veranlaßt sah, den unteren Theil der Bahnhofsstraße abzusperren, um Unglücksfälle zu verhüten. Alles trachtete darnach, sich für 10 Pfg. in den Besitz der „Düsseldorfer Allgemeinen Carnevals-Zeitung“ zu setzen, welche bei ihrem ersten Erscheinen gleich so starke Nachfrage erregte, daß sich der Verleger veranlaßt fühlte, die Auflage um 5000 Exemplare zu erhöhen und sie notariell beglaubigen zu lassen. Somit wäre denn der Wunsch der Carnevalisten erfüllt und ihnen durch die Herausgabe der jeden Mittwoch in einer Auflage von 10000 Exemplaren erscheinenden „Düsseldorfer Allgemeinen Carnevals-Zeitung“ ein Organ geboten, worin sie alle Vereinsangelegenheiten, sowie Berichte, Vorträge, Lieder etc. veröffentlichen und besprechen können. Eigentlicher Zweck dieses Unternehmens ist, den Düsseldorfer Carneval zu heben und ihn durch eine allgemeine gleichmäßige Behandlung in den Rahmen der Einigkeit zu bringen, wozu wir hoffentlich die volle allseitige Unterstützung sämtlicher Carnevalsvereine erhalten werden, damit der Flug der Raben, welche, wie jüngst ein berühmter Dichter sang, die Lüfte krächzend durchzogen, gehemmt werde.

Mit carnevalistischem Gruß: Die Redaction.

WIE ET WOR



CARNEVALS-COMITÉ



【 カーニバル委員会 】

— 過去 —

19世紀初頭から1920年代にかけて、デュッセルドルフの市民と訪問者はカーニバルの興奮に包まれていたと目撃者たちは語っています。しかし、街の名士たちは「秩序のない振る舞いを適切に管理するため」、「祭りを取り仕切るカーニバル委員会」(Festordnendes Carneval-Comité) を設立しました。

この委員会は、現在の「デュッセルドルフ・カーニバル委員会」(Comitee Düsseldorfer Carneval e.V. / CC) の前身となります。

幸いなことに、美術の街デュッセルドルフでは、この新たな使命を支える仲間を見つけるのに時間はかかりませんでした。芸術家ゲオルグ・スピックホフ (Georg Spickhoff) によれば、画家、彫刻家、建築家たちは「カーニバルにおいても繊細で洗練されたユーモアを持ち、その創造性を祭りやパレード、さらにパーティールームの装飾に独自の形で表現することができたのです」。その結果、「カーニバル委員会」の設立は大きな成功を収めました。



PRINZ ANDREAS I. & VENETIA EVELYN 2025



HÜTT



DAS PRINZENPAAR



【プリンツェンパー】

— 現在 —

1894年以来、デュッセルドルフのプリンツェンパー (Prinzenpaar: プリンツ=王子 と プリンツェッシン=王妃) は、カーニバルにおける王室の輝きを象徴しています。11月に行われる戴冠式から灰の水曜日 (Aschermittwoch) までの間、プリンツ (Prinz = 王子) と ヴェネツィア (Venetia = 王妃) は補佐官とともに、大小さまざまなホールや社会福祉施設、公共の場で数百回にわたる公演を行います。

週末には、1日12時間から14時間をプリンツェンパーとして過ごすこともあり、その任務は決して楽ではありません。しかし、イエッケン (Jecken) たちの喜びと熱狂によって、その苦労は十分に報われます。

どのプリンツェンパーも個性的ですが、彼らの目的は共通しています。それは、「心にユーモアを持ち、人々に忘れられないひと時を提供すること」です。

* Jecken (イエッケン): カーニバルに参加する人々を指す言葉。特にデュッセルドルフのカーニバルでは、熱狂的な参加者を表現するのに使われます。



PETER FRANKENHEIM 1895



WIE ET WOR



HELD KARNEVAL



【カーニバルの英雄】

— 過去 —

宣伝効果は予想以上に早く訪れました。「カーニバル委員会」の責任者たちは、郊外の住民を街に呼び込むためにさまざまな新しい試みを行いました。その中で、**Rosenmontagszug**（バラの月曜日のパレード）のほかに、「カーニバルの英雄」(**Held Karneval**)のキャラクターが登場し、現在のプリンツェンパー (**Prinzenpaar** : プリンツ=王子とプリンツェッシン=王妃)の前身が重要な役割を果たしました。「御愉悦の王」「道化の王」と称された彼は、デュルケン市のナーレン (**Narren** : 道化師たち)とともに大きな注目を集めました。バラの月曜日のパレードでは、「名誉ある貞淑な未婚の娘**プリスカ・ペトロネツラ・デュッセルブラースホルン**」(**Priska Petronella Düsselblashorn**)と「デュルケンの夜警ギゼリヌス・シュメルツェンビア」(**Giselinus Schmerzenbier**)の結婚式が披露されました。

その後、バラの月曜日 (**Rosenmontag**)は「楽しい舞踏の夜」で締めくくられ、ほぼ途切れることなくスマレの火曜日 (**Veilchendienstag**)へと続き、カールス広場 (**Karlsplatz**)で「カーニバルの騎士戦」が繰り広げられました。

目撃者によると、街のすべての宿屋や個人の家が人で満員だったとのこと。また、記録には「ベルギッシュ地方、エルバフェルト、バルメン、エッセン、ミュールハイム、デュイスブルク、クレーフェルト、ノイスから訪れた興奮した農民たちが、一日中、旧市街の通りをお祭り気分で練り歩いていた」と記されています。

* 「カーニバル騎士戦」は、カーニバルの最後の日に行われるユーモラスな伝統行事です。参加者はコスチュームを着て、演技で騎士の戦いを模倣し、競争やパフォーマンスを楽しみます。このイベントはカーニバルの伝統で、社会的・政治的テーマをユーモアを交えて表現する場としても知られています。カーニバルパレードの一部として行われ、翌日からは断食期間が始まります。



AROLLIS



Motten-
burger



Fidèle
Jonger



Große
KARNEVALS-
GARDIE
1890

KLADDE-
RADATSCH



Wind
müller



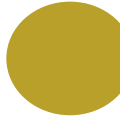
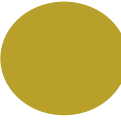
SCHATTEN-
SPEELER



Mond
wechsler



K.G.
MASKE
07 E.V.



K.G.
Rheinmeister
Düsseldorf
e.V.



Närrische
Speckfliegen



CONGO
BRÜDER

Gunken
Club



Derendorfer
Funken 1974



SAXONIA



K.G.
Altstadtkürmer
Düsseldorf
2012 e.V.

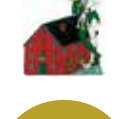


Die
nide
Hünkes



HUMMS-
DUPP

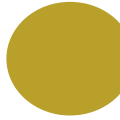
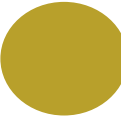
Zacherlin



BLAU
WOLKE



KARNEVALS-
FREUNDE
GARATH



Musikalischer
Bildungsverein



KG STORCH
BRÜDER 010
e.V.



K.G. Düsseldorf
Röhrengarde
Rot-Weiß
1950 e.V.



KG
Altstadt Funken
Blau-Weiss
Düsseldorf 1995
e.V.



DKV
Blau Gold



HG Jan
Wellem
e.V.



Düsseldorfer
Feldjäger



Die feinen
Möhnen
e.V.



Interessen-
gemeinschaft
Pauls-Mühler
Jecke e.V.



KG.
Rheinische
Stimmgaskanonen



ZOO
Funken
e.V.



Närrische
Hausfrauen



K.G.
De Anger-pänz



DOTZ-
MÜHLE



DSG
Jecke Lütt



HÜTT ON WIE ET WOR

VEREINE

HÜTT

【カーニバル団体】 — 現在 —

デュッセルドルフのカーニバルは、色とりどりの多様性に溢れ、その魅力は多くの団体によって支えられています。

デュッセルドルフ・カーニバル委員会 (CC) の傘下には、70以上の団体が所属しており、約8000人の会員が“Fünfte Jahreszeit” (第五の季節) と呼ばれるカーニバル期間だけでなく、夏の間もさまざまな活動やイベントを通じて地域に活気をもたらしています。

団体の規模は、小さな地区クラブから最大500人を抱える大規模な社交団体やガルデン (Garden) までさまざまです。すべての団体に共通する目標があります。それは、「伝統を守り継ぎ地域社会との絆を深めること」です。

さらに、その一環として、若手の育成も行われています。多くのクラブにはジュニアグループや子ども向けのダンスガルデがあり、デュッセルドルフ・カーニバル委員会 (CC) は毎年、小さなカーニバルファンを遠足に招待し、その活動を奨励しています。

デュッセルドルフ・カーニバル委員会 (CC) にとって、加盟団体はデュッセルドルフの冬の伝統行事を支える重要な基盤を形成しており、今後さらに強化されることと考えています。

* Fünfte Jahreszeit (第五の季節) とはカーニバルシーズンを指す表現で、通常の四季に加え、カーニバルの時期が特別な「季節」として認識されています。

** Garden (ガルデン) : カーニバルの伝統的なパフォーマンスグループで、華やかな衣装を身にまとい、ダンスやショーを披露する重要な存在です。

VEREINE

WIE ET WOR

【カーニバル団体】 — 過去 —

18世紀後半、ラインラント地方がフランスに占領されていた時期、「楽しいのはおしまいだ (Schluss mit lustig)」という理由で、街での仮装が禁止されました。ホールや家の中での仮面舞踏会は引き続き許可されましたが、規制はさらに厳しくなりました。

カーニバルを楽しみたい人は、「3日間のカーニバルのための警察カード」 (Polizeikarte) を購入し、持ち歩かなければなりません。政治的・経済的・社会的な変化により、19世紀初頭にはカーニバルの様相も変わりました。裕福な人々は引き続き祝祭を楽しんでいましたが、街中のカーニバルは興味がうすれてきました。

しかし、1825年に「カーニバル委員会」が設立されたことで転機が訪れ、ただちに最初のカーニバルクラブが形成され、その一例が「一般カーニバル友の会」 (Allgemeiner Verein der Karnevalsfreunde e.V.) (AVDK) です。AVDKは1829年に設立され、現在ではデュッセルドルフで最も古いカーニバル協会であり、ドイツで3番目に古いカーニバル団体となっています。

* Polizeikarte (警察許可証) : フランス占領時代の規制の一環で、カーニバルに参加する際に必要だった許可証。

** AVDK (一般カーニバル友の会) : カーニバルの伝統を守り続けるデュッセルドルフの象徴的な団体。



HÜTT



KUNST



【 芸術 】 — 現在 —

偉大なる芸術とカーニバル — そこに接点はあるのでしょうか？
デュッセルドルフのカーニバルは、その点を見事に証明しています。

カーニバルの勲章： カーニバルの家（Haus des Karnevals）では、数百個もの個性的で精巧な勲章が天井から吊り下げられ、空中でゆらゆらと揺れ動いています。その壮観な光景は、訪れる人々にまるで勲章に酔いしれるかのような感覚をもたらします。これらの勲章の中には、2000年から世界的に有名なアーティストによってデザインされたプリンツェンガルデ・ブラウ・ヴァイス（Prinzengarde Blau-Weiss）の歴代の勲章も含まれています。

美術アカデミー（Kunstakademie）： カーニバルと美術アカデミーは、長年にわたり深い関係を築いてきました。たとえば、ゲルハルト・リヒター（Gerhard Richter）のような著名なアーティストたちは、ローゼンモンターグのパレードで使用される山車のデザインに携わってきました。

衣装： デュッセルドルフのファッションデザイナー、ハンス・フリードリヒス（Hanns Friedrichs）は、自身の芸術がカーニバルの衣装に取り入れられたことに大きな喜びを感じていました。この影響は現在でも受け継がれ、多くの人々が個性的で愛情あふれる衣装をデザインし続けています。

カーニバル・スピーチ（Büttenrede）： ユルゲン・ヒルガー、ヘルマン・シュミッツ、クラウス・ウンガー、ホルスト・シュラーグ、ヴォルフガング・ライヒなどのアーティストたちは、洗練された言葉の達人として名声を博しました。

ダンス： ガルデダンスやショーダンスは、音楽と動きの芸術的な結びつきを表現しています。伝統的なスタイルから現代的なパフォーマンスまで、さらにはその年のカーニバルのテーマに基づいて演目が披露されます。

音楽： 毎年、新たに作曲・編曲されるカーニバルのモットーソングをはじめ、有名な舞台歌手やバンドが個別に作曲した楽曲など、幅広い音楽が演奏され、カーニバルを華やかな雰囲気を一層引き立てています。
(舞台歌手： Hans Löttsch, Pit&Joe, Hans Heinrichs, Dietmar Kivel, Hans Ludwig Lonsdodfrer, Michael Hermes)

(バンド： BoB, Alt Schuss, De Fetzer, Swinging Funfares Toten Hosen)



WIE ET WOR



KUNST



【芸術】

— 過去 —

「デュッセルドルフの画家たちの表現欲は、カーニバルでその頂点を迎える」

この言葉は、1838年に仮面祭を体験した詩人で劇作家・演出者の
カール・レーベレヒト・インマーマン (Karl Leberecht Immermann) が
自身の著書『仮面の対話』に記したものです。

「仮面の華麗さの栄光の空に輝く星々」と称されたこれらの芸術家たちの祭りは、
デュッセルドルフのカーニバルの歴史において特別な評価を得ています。
この輝きは、1848年の革命の年に設立された芸術家団体「Malkasten」(マルカステン)
だけでなく、1835年11月に創設され、19世紀40年代半ばまで存続した
「デュッセルドルフ芸術家家族協会」の時代からすでに称賛されていました。

* 仮面の華麗さの栄光の空：カーニバルの華やかさと栄光を象徴的に表現しています。

** Malkasten(マルカステン)：デュッセルドルフで有名な芸術家団体の名前。
芸術家の創作と交流を目的とした組織。

*** デュッセルドルフ芸術家家族協会：初期の芸術家たちの団体で、
家族的な雰囲気の中で活動が行われていました。



HÜTT



HOPPEDITZ



【ホッペディッツ】

— 現在 —

3… 2… 1… ホッペディッツ、目覚めよ！

この目覚めの掛け声が市庁舎広場に響きわたると、新しいカーニバルシーズン (Karnevalssession) が始まります。例年通り、11月11日、最初は何も起こりません。

しかしその後、巨大なマスタードポットのふたが揺れ始め、少し間をおいてからホッペディッツと呼ばれるカーニバルの伝統的なキャラクターが中から姿を現します。その瞬間、愉快的な群衆から熱狂的な歓声が上がります。

毎年恒例のホッペディッツ大道化師のスピーチは多くの人々が心待ちにしており、誰にでも容赦なく皮肉や批判が浴びせられます。ホッペディッツがふさわしいと判断した人物には辛辣な言葉が投げかけられ、政治や地元の出来事、さらには社会、文化、スポーツに関する過去の出来事がテーマになります。デュッセルドルフの大道化師の役割は毎年変わることなく、過去33年間で次の4人がこの衣装を身につけて演じました：ヘルマン・シュミッツ (Herrmann Schmitz)、ユルゲン・ヒルガー (Jürgen Hilger)、ヴァルター・ハーマッサー (Walter Hamacher)、トム・バウアー (Tom Bauer)。

2009年以降、子どもたちも「子どもホッペディッツ」 (Kinderhoppeditz) の目覚めを楽しむことができるようになりました。

*Hoppeditz (ホッペディッツ)： シーズンの開始を告げる、デュッセルドルフのカーニバルに登場する伝統的なキャラクターです。皮肉屋で、辛辣な批評とユーモアを持ってスピーチを行うのが特徴です。

** 巨大なマスタードポット： ホッペディッツが出現する際に使われる象徴的な道具。



MONUMENT DES ERZNAHRN HOPPEITZ
 ERRICHTET ZU DÜSSELDORF DEN 31. SEPTEMBER
 XII. JAHR DER NARRHEIT 1841.



**DAS HOPPEITZ-DENKMAL STAND VON 1841 BIS 1860
 AUF DEM KARLSPLATZ. INSCRIFT IN NARRENSCHRIFT**



WIE ET WOR



HOPPEDITZ



【ホッペディッツ】

— 過去 —

ホッペディッツの生命は短いです。

カーニバルは毎年11月11日に始まり、灰の水曜日（Aschermittwoch）に終わりますが、ホッペディッツは毎年、新たに目覚めます。デュッセルドルフのユニークな道化師キャラクターは、すでに19世紀初頭に華々しく登場しました。当時、ホッペディッツを演じた人物は不明ですが、確かなことは、彼がティル・オイレンシュピーゲルや宮廷道化師に続き、多くのファンを持っていたことです。彼を称えて、1841年にはカールス広場（Karlsplatz）に記念碑が建立されました。しかし、この記念碑は1860年までしか存在しませんでした。

記念碑の台座には幾段かの階段が設けられ、4本のカラフルな柱には桶の上部にナーレン（Narren）の頭部が刻まれていました。その中央には、手にワイングラスを持つ、歌によく登場する道化師の実物大の像が立っていました。柱の上には、サイコロ、大きな鈴帽子、ボトル、風車などで飾られた箱型の大きな天蓋が取り付けられていました。伝えられるところによると、この記念碑の除幕式では、ナーレンfolk（Narrenvolk）の「ヘラウ」（Helau）の声援を受けながら、上部の天蓋の扉が開き、200羽の白い鳩が空へ飛び立ちました。鳩たちは首に巻かれた紙に、デュッセルドルフ・カーニバルの挨拶が書かれ、世界へ向けて飛び立っていったと伝えられています。

*Narrenvolk（ナーレンfolk）：直訳すると「愚か者の民」や「道化の民」という意味です。この言葉は特にドイツのカーニバル文化に関連して使われることが多く、カーニバルの期間中、人々は社会的な規範を一時的に放棄し、愚かな振る舞いや風刺的な行動を通して日常生活のストレスや鬱憤を発散します。そのため、「ナーレンfolk」という言葉は、そうした自由で愉快的な集団を指すことが多いです。

**Helau（ヘラウ）：デュッセルドルフをはじめとするカーニバルで使われる祝祭の掛け声。



ZUKUNTSIMPRESSION KI-ERSTELLT



HÜTT



WELTKULTURERBE



【世界文化遺産】

— 現在 —

特別な生き方 - それは間違いなくカーニバルの重要な特徴です。

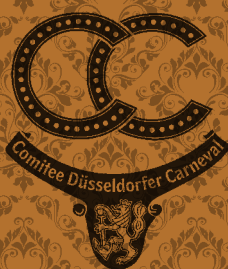
2015年、ドイツのユネスコ委員会はラインラント地方のカーニバルを全国的な無形文化遺産リストに登録することを決定しました。この決定を後押ししたのは、強い統率力と、ラインラント地方の人々に多くの喜びと共同体の一員であるという意識をもたらすという重要な要素でした。

その決定の基盤となったのは、ノルトライン＝ヴェストファーレン州にある4つのカーニバルの中心地によるカーニバル祭り委員会の共同の取り組みでした。

具体的には、アーヘン、ボン、ケルン、そしてデュッセルドルフのカーニバル祭委員会です。

その1年前、ラインラント地方のカーニバルはノルトライン＝ヴェストファーレン州の無形文化遺産リストに登録されました。しかし、アーヘン、ボン、ケルン、デュッセルドルフのカーニバル委員会は、さらに高い目標を掲げていました。2019年から、ラインラント地方のカーニバルを、シュヴァーベン・アレマンニシュ地方 (Schwaben-Alemannisch)の「ファストナハト (Fastnacht)」とともに、ユネスコの世界文化遺産に認定されることを目指しています。

*Schwaben-Alemanisch (シュヴァーベン・アレマンニシュ地方) は、ドイツのバーデン＝ヴュルテンベルク州とバイエルン州の一部を含む地域を指します。



IMPRESSUM UND WEITERE INFORMATIONEN UNTER WWW.HELAU.CC

